

⑤東立小屋組み。～ 最も普通の小屋組で。(基本的には柱・軒桁・小屋梁で京呂組み) 現在住宅建築では数多く使われている。柱・桁といった軸組の上部に梁(小屋梁)を渡してから東立て、母屋。垂木を屋根形に依じて組立てゆく工法である。

○和小屋組は木材で組上げてゆく構造であるだけに、接合部分が非常にいためられるわけである。昔はこの接合部分を金物を使って緊結し丈夫にすることはできず、あまり考えずに、すべて木材でその弱さをカバーしようと匠たちが工夫を重ねてきたはずである。その結果今日見るような「継手」・「仕口」・「構法」等が残ってきたのだが、今日まで残るには、先人「匠」が木材や使用部位それぞれの性質を良く理解し大切にしたデリケートな努力の結晶からだと思われる。

★設計図伏図は、水平グループと、勾配グループに伏図を分けること。

◆ 3. 2階小屋組 → 水平グループ。

● 軒桁 (のきげた)

軒桁は建物の一番外側に面した小屋組材で、小屋組と軸組との接合部つまり「稜」に相当する構造部材である。(切妻側に面した小屋組材は妻桁)

軒桁は建物の周囲を守る重要な部材で、前記したが軒桁の成は柱の幅の1.5倍以内とすること、180mm(6寸)。軒桁を受ける柱の位置によって軒桁下に 添桁(助桁) を入れ補強する。(真壁構造の場合は 力貫 を入れる)。普通の場合軒桁寸法は同じとし、継手か所はなるべく少なく考えること。

継手に付いては、腰掛け蟻継ぎ、腰掛け鎌継ぎ、追掛け大栓継ぎ、金輪継ぎ、等があるがそれぞれ継手の位置と状況によって考えなくてはならない。下級は腰掛け蟻継ぎ、中級は腰掛け鎌継ぎ、上級は追掛け大栓継ぎ、金輪継ぎ。(切込み断面が同じ)などに大別される。継手か所で材の元口と末口継ぎを 送り継ぎ、末口と末口継ぎを 行き合い継ぎ が普通に使用される。元口と元口継ぎを 別れ継ぎ といい一般に不吉とされ建物上部で用いないほうがよいといわれている。

● 妻桁 (つまげた)

妻桁も軒桁と同じく建物の周囲を固める横架材で「稜」に相当する構造部材である。材料寸法は、前記したが軒桁成より少し15~30mm(5~1寸)位大きい成とし、下端揃えとする。継手か所はなるべく少なく考えること。

切り妻屋根(古くは真屋(まや)いらか造りといった)の妻側の部材で、真壁構造の場合は妻桁上部の 泥障(あぶり)仕舞い を考えておくこと。

● 間仕切桁 (まじきりげた)

間仕切桁は、2階の間仕切桁と同じく横架材で構造上重要な部材で、2階軸組「柱」間仕切上部と、小屋組(勾配グループ)や屋根葺材等の荷重や水平外力を受けもつ部材であり、間仕切桁と言う。間仕切桁の中でも特殊な柱等で、柱面と接合架設する桁を、間仕切差桁(柱面に仕口)と表示すること。